田中　裕美子　著

## 『日本における既婚女性のパートタイム労働：変わる働き方、変わらない女性の役割』




（晃洋書房、2025 年 3 月、202 頁）

田中　裕美子

これまで、既婚女性の働き方において、パートタイム労働は大きな位置を占めてきた。働き方が多様化するなかで、なぜ既婚女性では、なお「パートタイム労働」が主要な就業形態となっているのだろうか。

本書は、女性の働き方に関する意識の変化と実態を、政策変遷というマクロな視点と、生活時間に着目するミクロな視点から分析するものである。

まず取り上げるのは、パートタイム労働に関する政策の変遷である。政策の変化のなかで、パートタイム労働はどのように位置づけられてきたのか。これが 1 点目の問いである。さらに、主に既婚女性が担ってきた「家事・育児」などの家庭責任の実態は、「性別役割分業（男性は仕事、女性は家事・育児）」に対する意識の変化に伴って変わったのだろうか。これが 2 点目の問いである。

1 点目の問いについては、労働政策におけるパートタイム労働政策の比重が低いままであったことが明らかになった。

1950 年代から 2010 年までの労働省（現厚生労働省）「婦人労働の実情」を見ると、パートタイム労働政策は、女性労働政策のなかで長らく優先度が低かったことがわかる。1980 年代以降、「女性の社会進出」が重要なキーワードとなるにつれ、女性労働政策の中心は、「男女雇用機会均等法」に代表されるような、フルタイムで働く女性労働者に関する政策へと移っていった。

2 点目の問いについては、「性別役割分業」に関する意識は変化してきたものの、実態としては、主に既婚女性が「家事・育児」を担う状況には大きな変化はみられないことが示された。これは、各時期に刊行された NHK『日本人の生活時間』の分析によるものである。現在、「性別役割分業」に関する意識は変わりつつあるが、多くの既婚女性はパートタイム労働者として働きながら、なお「家事・育児」の主な担い手であり続けている。意識と実態の間には、依然として大きな隔たりがある。

本書の特徴は、パートタイム労働政策と「性別役割分業」の実態および変化について、長期的な視点から、労働省（現厚生労働省）「婦人労働の実情」と NHK『日本人の生活時間』を手がかりとして実証的に分析している点にある。

近年、女性労働者の出産後の継続就業率は上昇傾向にあり、男性の育児休業取得を促す取り組みも進められている。働く環境は変化しつつある。こうした変化を契機に、すべての労働者がそれぞれ望むワーク・ライフ・バランスを実現することが求められる。

一人ひとりにとってよりよい働き方を考えるためにも、多くの人に本書を手に取っていただきたい。

（たなか　ゆみこ　福井県立大学看護福祉学部教授）